

第七章 ウクペスタンの不思議な男

ソシア連邦の一員だったウクペスタンという国があった。連邦の中では比較的広い領土を持ち国民一人当たりの経済力はソシアを凌いでいた。身体の小さな兄貴と言った感じだった。それでいて弟のソシアに優しかった。弟の方は優等生的な兄に劣等感を持っていたが同じ家の下では兄弟喧嘩が表面化することはなかった。しかし、兄が自由を求めて古いきたりのある家から出てウクライナー共和国と名前を変えてから両者に大きな溝が生じた。よくある話だ。

本家を継いだ弟は優秀で先を見る才能もある兄にコンプレックスを持っていた。ところが才覚があるといっても兄にも問題があった。それは「自由」の扱いに慣れていなかったことだ。

自由は余程足腰の強い国民でしか使いこなせない。自由には責任がしつこくまとわりつくからだ。選挙で大統領や代議員を選んでも多様な考えを持つ国民を、つまり個性集団をまとめ上げるのはかなり難しい。だからどの制度よりマシだという理由で多数決を導入する。もちろん少数意見も大事にしながら。民主主義制度下で決断に時間がかかるのはこのためだ。

あえてこのルールを無視して国民の方からトップダウンを求めることがある。こうなると権力者の思うつぼで心地のいい声をかけると国民は多数決より権力者に決断させた方が気楽だと考えるようになる。独裁者あるいは独裁制の誕生だ。独裁者が不正に蓄財してもチェックがで

きないから昔のような奴隷に成り下がってしまう。

日々食べていければいいと思うようになって自由より平穏な日暮らしで満足する。その日暮らしが崩れて独裁者に文句を言うとは慎ましやかなその日暮らしの自由すら奪われて独房で生活しなければならなくなる。裁判はなく批判が逮捕に直結する。このとき初めて自由がいかに大事かを知るが、すでに後の祭りである。

*

「私は独裁者じゃないわ」

もちろんイリに心配は無用だった。行政府長官、裁判所長官、国民会議議長、その中でも公正な選挙で選ばれて職務に専念している。

中華民国とソシアという巨大国家と隣接するイリライナー王国はイリがいなくても国民の総意のもとで巧みな外交と質素儉約を基礎に経済力を高めてきた。そんなイリライナー王国を範とする国が多数現れた。もちろんイリライナー王国も北欧やバルト諸国という良き先輩諸国の影響を受けた。

これらの先輩諸国は重税を独裁者に払うのではなく自ら選んだ政府に自主的に払うという方針に変えたところに特徴がある。

独裁国家では外圧を利用して国民の不満を逸らすことがある。それは独裁者の行動が大雑把になってきたからだ。始めのうちは独裁者は緻密に行動する。やがて恫喝の効果が揺るぎない

独裁的地位を築く。国民が従順になると緊張感がほぐれて独裁者は化粧を落とす。つまり仮面を脱ぐ。恫喝と油断が同居するから自制することができなくなる。そして独裁制の終わりが始まりが生まれる。

独裁者の恫喝は自国民には通用するが近隣諸国に通用しない。ならばと近隣諸国を領土化すればいいという短絡的な発想でわがままを押しつける。当然圧縮されたバネのような反発が起こる。国際世論も黙ってはいない。もちろん国土をトラックに積んで引越すことはできない。そこで大まかに言つて次の二つの方法をとることになる。

どうしようもないという切迫感からいったん個人主義を棚上げして意見を集約する。そして一本化して愛国心を高めて防衛力を強固にしようと試みる。独裁国家の愛国心が独裁者の押しつけに過ぎないのに対してこの自由を結束させるという民主主義の愛国心はかなり強力だ。なぜなら有事のときに士気が上がるからだ。そのためには日頃から政府は用信頼されていなければならぬ。そうしないと独裁国家に隙を与えてしまう。

もう一つの対処方法は独裁国家にすりよるやり方だ。経済力が弱い国あるいは小国がよく取る方法だ。従順さを示すが対局にある非独裁国家との関係は維持しておくというしたたかなやり方だが国内の有力者の影響を受けやすいから政権が揺れ動いて不安定化する。

*

一昔前イリが不在でもイリライナー王国は女王が支配していたが実質民主主義国家として国

民は東の中華民国、北のソシアにさしたる軍隊もないにもかかわらず毅然とした態度で対処した。

一方ウクライナー共和国の事情や経緯はイリライナー王国とはまったく異なる。政権がめまぐるしく変わった。それは国民が親ソシア派と親ヨーロッパ派に別れたことが原因だった。そこにソシアが介入したことで少数派の親ソシア派を過激化させた。いずれ独裁者プレンコンに奴隷のように扱われることとなるなど夢にも思わずに。

このようにつけこまれた原因はただ一つ。プレンコンとはまったく違った本当の意味での全国民から慕われるイリのような指導者がいないことだった。大昔のイリ村もウクペスタンも共に大国の自治領か属国だった。

イリ村は中華民国の一自治領でイリ族自治領と呼ばれていたが王国となって独立した。それはイリの弟と誤解されたノロの功績に追うことが多いが、自由奔放さといい加減さをノロと共有するイリのがままな性格も寄与した。ウクペスタンにも長い金髪の美人大統領もいたが権力に固執した点でイリと異なる。つまり反対派からも愛されるほどの可愛さがなかった。

ウクペスタン人の男はがっしりしていてひげを蓄え男前が多い。女も子供のころは可愛くやがて美女になる。うらやましい限りだ。それなのに美男美女の国としては絶えず不幸な道を歩む。イケメン、美女への嫉妬でないだろうが、この国は余り明るい歴史を持っていない。

しかし、ソシア連邦に属しはしていたが属国であり続けた。我慢強いのである。ここに悲劇

国家としての原因がある。国名がウクライナー共和国となり鉄道が国の隅々に開通するとウク・ライナーと銘打った青と黄色を基調とした美しい特急列車が国内だけではなく東は北京、西はロンドンまで足を伸ばした。鉄道は交通機関として非常にエネルギー効率が高いので飛行機を利用していた旅行者はもちろんのこと時間を惜しむビジネスマンや政治家までもが鉄道を利用するようになった。

特急イリ・ライナーは女性から可愛いと人気があるがスピードはあまり速くない。後の章でも述べるが、例えばバッハ・ライナーは高速で超高性能だが見た目が質実剛健なので損をしている。ワルツ・ライナーは優美だが運行範囲がヨーロッパ圏に限られていた。ビートル・ライナーは起点がヨーロッパの端のロンドンなので不利だった。ダビンチ・ライナーは地震が多い地帯を本拠地に行っているので安全性に問題があった。そのほかのヨーロッパやその周辺諸国の列車も個性的だがローカル列車の多くは特急と呼ぶほどの品格がなかった。

とにかくヨーロッパ並びにその周辺国の国民はこの特急ウク・ライナーで旅行することがステータスとなった。ウクライナー共和国に侵攻したソシア国民でさえこの特急ウク・ライナーで旅行するのが夢だった。それほど洗練されていて美しい特急列車だ。

*

旧姓ウクペスタン。今はウクライナー共和国と名乗るこの国に未来はあるのだろうか。男女平等が社会に浸透しているので兵士でも女性が多い。先の大戦でモンペ姿で竹槍を持ってかり

だされたどこかの国と違って男と同じ軍服を着て重い銃器を持って最前線に立つ。それはバルト沿岸国や北欧諸国でも同じだ。

不定期となったが特急ウク・ライナーは住居を破壊された市民を乗せて隣国へ避難させたり逆に本国に戻って祖国を守ろうとする市民を運ぶ。運転手は女性が多いし、その腕前は相当なレベルにある。一方不安がる乗客を見守る車掌やスタッフは逆に男性が多い。いざというときには腕力に勝る男性が頼りになるからだ。さらに列車が襲撃を受けたらすぐ兵士として戦うこともできる。

ところがその中で一風変わった車掌がいた。肥満体で背が低く顔中黒っぽい毛というかヒゲというか、笑っているのか怒っているのかよくわからない。顔の上部の毛は眉毛が進化したのだろう。下部は間違いなしにヒゲだ。口から目にかけては鼻毛が占領しているとか言いようがない。もちろん顔の側面からは髪の毛が自らの力を誇示するために侵食している。ビションフリーゼという全身白い毛をまとった可愛い犬がいるが、その黒毛版だと想像するとよく分かる。鼻の一部が露出しているぐらいで目ですら長い豊富なマツゲに占領されている。

要はこの車掌の顔はほとんど毛に覆われているのである。顔がブラックボックス化されている。胴長短足の男がなぜか超美人が運転する特急ウク・ライナーのチーフ車掌だ。